

平成27年度 学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって邁進する生徒を育て、その実現を図る。			
具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い（改善策等）
① 校外模試等の結果を教科会や学年会で分析し、生徒にフィードバックするとともに、1ランク上の志望を持たせることにより学習意欲と学力の向上を図る。	1, 2年生校外模試の3教科偏差値60以上の生徒が(母数は在籍数) A 30%以上 B 25%以上 C 20%以上 D 20%未満である	1年生7月進研模試 【判定：D】 3教科SS60以上 59名(18.3%) (昨年同期 79名) 2年生7月進研模試 【判定：D】 3教科SS60以上 56名(17.7%) (昨年同期 80名)	1年生は、英語、国語は平年並みのスタートとなったが、数学の偏差値が過去5年間で最も低い結果となっている。今後は週間課題の内容や下位層への手当てなどに配慮しながら、進路講演会などを効果的に行い、強い進路志望を抱かせる指導が必要である。 2年生は、3教科総合の偏差値が下がり、とくに英語は前回との差が大きい。今後は3年生に向けて長期と短期の目標を効果的に設定させ、具体的な学習方法を指導していく一方で、強い志望を抱かせるための方策を考えていく必要がある。
	3年10月記述模試で5教科文/理偏差値が文系で56、理系で54以上の現役生徒が A 35%(110人)以上である B 29%(90人)以上である C 23%(70人)以上である D 23%(70人)未満である	1, 2年生で難関大を志望する生徒が A 50名以上である B 40名以上である C 30名以上である D 30名未満である	3年生7月進研模試 【現時点での仮判定：C】 5教科文系SS56以上 49名 5教科理系SS54以上 39名 合計 88名(28.7%) (昨年同期 122名) 4月進路志望調査 難関大志望者 1年生 39名 【判定：C】 2年生 76名 【判定：A】
② 難関大学を中心とした高い進路志望の実現のため、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。	超難関大・国公立医学科の現役合格者数が A 3名以上である B 2名である C 1名である D 0名である 難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である	超難関・国立医学部の合格者数 【現時点での仮判定：B】 難関大および金沢大学の合格者数 【現時点での仮判定：B】	* 東大・京大の合格ラインを7月記述で文系SS76、理系74ラインとして判定する。文系は1名、理系1名、合計2名がその基準を満たす結果。(一昨年1名、昨年3名) * 旧帝大等の合格ラインを7月記述で文系SS70、理系66ラインとして判定する。文系は1名、理系6名、合計7名がその基準を満たす結果。(一昨年12名、昨年15名) * 金大ライン以上を7月記述で文系SS60、理系58ラインとして判定する。文系は32名、理系20名、合計52名がその基準を満たす結果。(一昨年53名、昨年72名)
③ CU(土曜補習)、補習、学習合宿を通して、より意欲的な学習の在り方へと切り替えさせる取組を行う。	「CUや補習は自分の学力向上に役立っている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(7月) 「学力向上に役立っている」67% (当てはまる14%+やや当てはまる53%) 【判定：C】	1年生は9月以降、習熟度別のクラス編成をCUに導入する。生徒の弱点を補強し、基礎力の充実を目指したい。 2年生は効果的な補習の内容を吟味し、弱点の補強および基礎力の完成を目指したい。 3年生のCUは9月で終了するが、その後は後期(平日)補習にて、生徒の応用力をさらに伸ばしていきたい。
④ 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任、教科担任等による積極的な面談を行う。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢により良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(7月) 「より良い変化が生まれた」62% (当てはまる17%+やや当てはまる45%) 【判定：C】	肯定的な評価は昨年同期に比べ9%減少した。また、「学校は、学習に関する質問や悩みに対応してくれている」(前年比-2%)、「学校は、学校生活に関する悩みに対応してくれている」(前年比-4%)となっている。個人面談における生徒理解や適切なアドバイスを効果的に行えるような手立てを考えなければならない。
⑤ 中高一貫教育校として6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート(7月) 「取り組んでいる」60% (当てはまる12%+やや当てはまる48%) 【判定：B】	年度当初の中高合同の教科会だけではなく、継続的に共通理解を図っている教科もあるが、教科により差があるのが現状である。現在、中高の接続のあり方について教科別に協議を重ねており、中高一貫教育のメリットを生かしたカリキュラムづくりを進めていきたい。

【重点目標2】 教科指導力の向上を図るとともに、あらゆる教育活動を通して生徒の論理的思考力や表現力の伸長を図る。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の扱い(改善策等)
① ICTの効果的な活用を含めて授業改善に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間4回以上あった」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート(7月) 「1学期の間に3回以上あった」36% 「1学期の間に2回以上あった」40% 【現時点での仮判定:A】	今後、本校及び錦丘中の研究授業や後期互見授業、探究スキル育成プロジェクト及び学力スタンダードに係る公開授業等も予定されており、年度末にはB判定以上になると思われる。今後とも授業改善に繋がるように取組を進めたい。
	「授業でICTをよく活用している」「時々活用している」教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート(7月) 「活用している」55% (よく活用している36%+時々活用している19%) 【判定:C】	昨年度は「よく活用している」21%、「時々活用している」28%で合計が49%であった。今年度は「よく活用している」の数値が増加しているものの、ICT活用の環境整備の進み具合を考えれば、もっと数値が伸びてもおかしくない。ICTの活用について継続的に実践を行い、学校全体での取組になるようにしたい。
	「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	生徒による授業評価(7月) 「高まっている」48% (当てはまる24%+やや当てはまる24%) 【判定:C】	昨年度は「ICTが効果的に活用されているか」の問いに対する肯定的評価が30%であった。質問項目の内容がよりハードルが高いものになっているが、昨年度よりも数値がよくなっているのは、今後の励みとなる。「使う」だけではなく「学習効果が高まる」ような取組をさらに進めたい。
	「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 85%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	生徒による授業評価(7月) 「伸ばす場面がある」76% (当てはまる25%+やや当てはまる51%) 【判定:C】	昨年度は「当てはまる」が25%、「やや当てはまる」が53%で、少し後退した。学力スタンダードの作成や探究スキル育成プロジェクトを核にして、教え込み型の授業ではなく、論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある授業実践に取り組みたい。
② 総合学習やLC探究等の授業内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。	「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	生徒アンケート(7月) 「関心を持つようになった」50% (当てはまる6%+やや当てはまる44%) 【判定:C】	昨年度は「当てはまる」が11%、「やや当てはまる」が47%で合計58%。昨年同期に比べ8%減少した。教科書の内容のみならず、世界的・社会的事象と関連づけて、生徒の興味・関心を広げられるような授業の工夫を進めていく必要がある。
③ 高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて読書指導を行う。	「授業の内外で推薦図書を紹介するなど、生徒の読書量を増やすための指導をした」教員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	職員アンケート(7月) 「生徒の読書量を増やすための指導をしている」38% (当てはまる9%+やや当てはまる29%) 推薦図書の紹介冊数 前期で平均2.3冊 【判定:D】	「生徒の読書量を増やすための指導をしている」割合が昨年同期より3%増加し、推薦図書の紹介冊数も昨年同期の平均1.9冊から2.3冊へと微増しているものの、割合としてはまだ少ない。読書アンケート(5月)では読書の契機として、「先生に薦められて」や「授業等で興味を持って」という生徒が約1割、「図書館の取組で」という生徒が約4割のことからも、教員からの働きかけを学校全体で意識して行っていくことが必要である。
	生徒1人あたりの貸出冊数が A 年間8冊以上である B 年間6冊以上8冊未満である C 4冊以上6冊未満である D 4冊未満である	7月末までの、生徒1人あたりの貸出冊数(図書館バーコードカウンターによる) 1年2.4冊 2年2.1冊 3年3.8冊 全学年平均2.7冊 【現時点での仮判定:C】	読書アンケート(5月)において、「本を読みたい気持ち」が「ある」28%と「ややある」31%を合わせると、約6割の生徒が読書意欲を持っていることがわかる。7月末までの図書貸出冊数の状況からすると、年間貸出冊数はC判定以上に到達可能である。今後も「新書を読もう」や「新聞を読もう」や「図書館教養セミナー」等の取り組みとリンクさせながら、生徒の読書活動を活発にしていきたい。
④ 論理的思考力を高めるために必要な試験問題の作成について教科全体で検討する。	年間を通して論理的思考力を問う問題の割合(点数換算)の平均値が A 15%以上である B 10%以上である C 5%以上である D 5%未満である	1学期中間試験、期末試験の状況から 【判定:B】	1学期中間試験、期末試験を確認したところ、どの教科も10点程度以上は思考力を問う問題が設定されている。思考力を問う問題の割合(点数換算)のみならず、より良い問題とするために、教科会で問題を共有し、継続的に検討していきたい。

【重点目標3】 学習、進路、生活、部活動等を有機的に結びつけ、より自立的内発的に取り組むことのできる、実践力のある生徒を育成する。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い（改善策等）
① 中学校と連携しながら、三点固定（学習開始時刻、就寝時刻、起床時間の固定）を図り、生活リズムを自ら整える態度を身に付けさせる。	遅刻をする生徒は一日平均で、 A 4人未満である B 5人未満である C 6人未満である D 6人以上である 「下校時間を守っている」生徒の割合が、 A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である	遅刻調査（4～7月） 1日平均の遅刻者数 4.2人 【判定：B】 学習・健康・生活に関するアンケート（7月） 下校時間を守っている生徒 全学年平均 87% 【判定：B】	1日平均の遅刻者数は昨年同期の3.5人より増えている。今年度の特徴として、体調不良や通院による遅刻が多く、寝坊など不注意による遅刻は少ない。体調不良者の遅刻について、保健室・相談室との連携や担任・学年団との連絡を密に取っていくなど、対応していかねなければならない。 下校時間を守っている生徒の割合は昨年同期の86%とあまり変わりはない。毎日生徒玄関に立ち下校指導も行ったが徹底するところまでには至っていない。下校指導は継続しつつ、ホーム担任や部活動顧問からも指導をしてもらうよう働きかけたい。
② 家庭学習時間調査による生徒の自省や様々な視点からの学年集会及び講演等における示唆を通じて、学習意欲を高めるとともに、生活全般において自立的・内発的な行動をとることができるように働きかける。	目標時間を達成している生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 「シラバスを定期的に活用した」教員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	学習・健康・生活に関するアンケート（7月） 目標達成率（平日） 1年66.8% 2年23.8% 3年36.7% 全学年42.4% 目標達成率（休日） 1年35.8% 2年26.1% 3年9.6% 全学年23.8% 【判定：D】 職員アンケート（7月） 「定期的に活用した」69% （単元ごとに活用24%、定期試験ごとに活用45%） 【判定：A】	平日の目標時間は1年120分、2年150分、3年240分、休日の目標時間は1・2年240分、3年総体総文後480分であり、どの学年も目標を下回っている状況にある。定期試験等が近づくと必要に迫られて確保しているようだが、週間課題などを含めた日々の学習が基礎力充実のために不可欠であることを意識させ、進路目標を明確に持って自律した家庭学習ができるよう、指導を続けたい。 昨年度は「あまり活用していない」と答えた教員が37%いたが、今年度は10%に減少した。「少なくとも定期試験ごとには活用しよう」との意識が形成されつつある。ただし、生徒アンケートでは「シラバスを活用し、計画的に学習を進めている」生徒の割合は11%となっている。シラバスの活用を計画的な学習に結び付ける工夫が必要である。
③ 部活動に所属している生徒の積極的な挨拶を核にして、生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	生徒アンケート（7月） 挨拶を積極的に行っている生徒 77% （校外からの来校者にも積極的に挨拶している34%＋友人や教職員には自分から挨拶している43%） 【判定：A】	生徒アンケートによると、挨拶を積極的に行っている生徒は77%と高い結果となったが、保護者や外部の方からは挨拶ができないと言われることが多く、朝の挨拶運動においても目視では約50%（2人に1人）しか挨拶ができていない状況で、生徒自身の評価と周りからの評価に開きがある。この結果を集会等において生徒に伝え、元氣よくしっかりと挨拶することを促すとともに、日々の授業での挨拶から地道に取り組んで行く必要がある。
④ 部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、自主性自立性の育成と部活動の活性化を図る。	部活動加入率が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である 1、2年生で「部活動と学習の両立ができている」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	部活動加入状況（5月） 1年 男子 100% 女子 99% 2年 男子 86% 女子 80% 3年 男子 87% 女子 86% 学校全体 89.8% 【判定：B】 学習・健康・生活に関するアンケート（7月） 「部活動と学習の両立ができている」 1年 61% 2年 54.3% 全体 57.7% 【判定：C】	今年度は特に1年生の部活動加入率が高く、ほぼ100%に近い数値となっている。部活動は人間形成において重要な役割を果たしており、学習との両立が上手くできている生徒が多いことは高校生活がより充実する一因ともなるので、今後もこの加入率が大きく下がることのないよう、担任や顧問による生徒へのケアを大切にしていきたい。
⑤ 生徒会主催の行事を生徒が中心となって企画運営し、今後、社会人として求められる自主的自立的な態度や実践的な行動力を育成する。	「各行事において、生徒の自主性を高める指導を行い、自主性は高まった」と思う職員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	職員アンケート（7月） 「自主性を高める指導を行っており、自主性は高まっている」74% （当てはまる13%、やや当てはまる61%） 【判定：B】 生徒アンケート（7月） 「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」72% （当てはまる24%、やや当てはまる48%） 【判定：B】	昨年同様、教職員、生徒とも7割以上が肯定的な評価となった。この後の紫錦祭や球技大会等においても、放置するのではなく手をかけ過ぎるのでもなく、生徒の次元での「自主性」を重んじた教職員の適切なサポートを促していきたい。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い（改善策等）
⑥ 学校、地域の環境美化に努め、環境ISO活動に積極的に取り組むことで、環境保全に対する意識の向上を図る。	<p>「ゴミ排出量&紙リサイクル量」の測定結果報告において、年間のゴミ排出量が昨年と比べて</p> <p>A 10%以上の削減 B 10%未満の削減 C 5%未満の削減 D 増加</p>	<p>生徒美化委員による測定値（4月～7月） 可燃ゴミと容器包装プラゴミの合計 26年度 1,343.9kg → 27年度 1,337.6kg 昨年比 99.5% (-0.5%)</p> <p>【判定：C】</p>	<p>今年度も早い段階から啓蒙活動に取り組んだことで、ゴミ減量に対する意識の向上は見られた。（4月～5月の測定値 H26：705.6kg → H27：605.4kg 昨年比 85.8%）ところが6月は、部室整理の可燃ごみ放出もあり、昨年を大きく上回った（H26：262.3kg → H27：334.7kg 昨年比 131.4%）。</p> <p>後期は、文化祭展示や学期始めの大掃除などの活動にあわせて啓蒙活動を行うことで、ゴミ削減の気運を高めていきたい。</p>
⑦ 担任、学年や部顧問、保健室、相談室が十分に情報を共有し、問題を抱えた生徒の早期発見と自発的解決に向けて協力する。	<p>「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が</p> <p>A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である</p>	<p>職員アンケート（7月） 「対応ができている」98% （よくできている24%、ほぼできている74%）</p> <p>【判定：A】</p>	<p>肯定的な評価がほぼ100%近くに上るが、「よくできている」という回答に限ると24%にとどまり、まだ十分とは言えない状態である。各学年団との連絡を一層緊密にし、学年所属の保健・相談室の教員とも定期的な連絡・協議を実施することで、生徒の問題解決に向けた努力をしたい。</p>
⑧ 学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	<p>「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が</p> <p>A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である</p>	<p>保護者アンケート（7月） 「学校からの情報を見ている」73% （当てはまる31%+やや当てはまる42%）</p> <p>【判定：C】</p>	<p>学年通信や進路だより発行の際、保護者にメールで通知してきたが、肯定的評価は前年同期の74%とほぼ同様であった。学年通信等の発行日がわからなかった時もあり、配信が徹底できなかった。各学年・分掌に総務への連絡を依頼し、この取組を継続し、メール配信の効果をみていく。</p>